恩德、慈悲心を受ながら、壁一重彼方の舅御の御面體、見る事も叫はぬか、地ハア、息切れて物言はれぬ、水でも湯でもと苦しめども、茶碗一ツ杓一本あら氣の毒なんとしよと、言ふ聲隣に響入り、茶碗に温湯壁越しに、情の親の手つきを見て、ハア、冥加ない有難いと夫婦わつと泣出し、茶碗に縋り手に縋り、お盃とも藥とも氏神のお神酒とも、此上のあるべきかと、二人戴き飲交し、申し御手は取れどもお顔は知らぬ、私はお許しなけれどお前の嫁、どうぞ御機嫌直して、惣七樣とも詞をかはし、地一期の見始め見納めに、お顔を拜ませ下されと、舅の手を我顔に、押當〳〵泣く涙、親の歎きもあらはれて、フシ腕顫ふぞ哀れなり、盡せぬ涙の

手を振放し、銀財布一ツ投出し、早ふ出て往け〳〵と言はぬばかりに門の方、敎ゆる手さへ引入るれば、今は親よ舅よと便る名殘もきれたるかと、又絶入て泣きけるが、調ナフ不幸至極の惣七に、是程のお慈悲、路銀まで下さるゝお心背くは猶不幸と、地財布を女夫が頂き〳〵、はや人顔も見えまい、是が眞の名殘じやと、互ひに身用意裙引上げ、泣く〳〵表に出けるが、隣の門を遙に見入り、調ヤレ姥唯一目親父樣を小女郎に見せてくれ、地路銀のお禮も申し度いと小聲にいふも聞付て、姥が出れば惣左衞門、調こりや姥、何をとぼとぼする、今の銀は隣の道具賣つた銀直に隣へ投込んだ、禮受る筈がない、惣左衞門が子供には商ひこそ敎へた

●生身に餌食　「生玉心中」には「生身に餌食天道人を殺さず」とあり、人は生れながらにして縁を備へたるをいふ。

●分量　分際といふべきか。

れ、非道の身過する子は持ぬ、地淺ましや不便や天道も日月も、神も佛も罰は當はなされねど、こつちから罰の下へ當りに往くとは知らぬかや、調生身には餌食あり、人間一人生るれば、乳房といふ天道の御扶持方正道の家職勤むれば、分限相應〳〵の、天の乳房が備はる、正道にない金儲け、榮耀する樣なれど、天道の乳首に放れ、三界の捨子となり、地野倒れ死するは幾人か、猫は炬燵に寢臥する、犬は土邊で物喰へど、炬燵な猫の眞似せぬは、身の分量を知たるゆゑ、畜類に劣つた身の程知らず、成れの果を思はれ、不便さに腹が立つはいやと包みかねたる涙なり、調ヤイ惣左衞門が子になりたくば、手鍋提ても正道に、淺ましき死を

●いろ　喪服の鈍色より喪服のことをいろといふ。

せぬ樣に、命全ふ何卒親を先に立て、惣左衞門が葬禮にいろを着て供して見せ、其時は我子じやと、棺の中から悅ぶ、地早ふ失ふと計りにて、わつと フシ泣入り泣聲の、耳に殘るを形身にてわかれゆくこそ　三重

下之巻　惣七小女郎道行

歌〳〵戀と小袖は一模樣、身に引締て合ふてこそ、寢心もよく着心もよく、よく〳〵見限り果られて追出され し、フシ我宿の、邊に顏を見られじと、戸口も店も明やらぬ、ホチクリ星も夜深き親の恩、重ねて着たる其時は、いとゞ心も輕かりし、今朝肌薄く行道は、チクリかたせ苦しき フシ身の行衞、心からとはいひながら、情馴染

●先へ心の關寺に　心のせくといふとな小町屋をかけ、なほ關寺小町の老衰の狀を、惣七が末路に利かせたるなり。

●辨がら島　唐物なり。「萬金產業袋」に曰く、辨柄、幅三尺九寸、地色すゝ竹、かば色等、島もやう、千すじ、棒すじ、たかの羽、とかけ島などあり、但たつ島ばかりの物なり。

の京の町、三條小橋で知る人に、粟田口かと思ひしも、先へ心の關寺に、身の衰への、フシ恥しき、今の小町屋惣七は、博多小女郎がならし竹、何時も心に懸て置く、

歌　親のかひきに綾錦、最早都を見ん事も、又と成るまい限りといへば、共に泣く〳〵憂きくろ繻子の、絲の切れざる辨がら縞の、愚痴なさら〳〵さうではないに羅紗もない事言しや綸子な、ナチス先へ行く子に尋ぬれば、拔け參宮の頭字が耳に留まる神心、守護給へと再拜の、袖に神樂の鈴鹿山、八十瀨の川に濡れ初めし、チクリおれとそなたが初戀に、二世も三世もかはらじと登り　唄　詰たる坂の下、今零落の身と知らば、さつと淺黃に染ふもの、フシ裏表ない心から、僞紫の色わるふ、

●ぬめまぼろし　ぬめは絖なり、これを夢幻にかけたり。

●關のお地藏は親よりまし　「松の落葉」「馬士踊」の唱歌「關のお地藏はおやよりましじや、おやも定めぬつまをもつよの云々」。

●おはりへ行く者　尾州へ行く者なるべし。

●ころり　雲助どもの符牒なり。

長地　やつれ顏見る悲しやと、絞る袂の涙の露、のべの草葉も色付ぬ、泣て心を亂せとか、方樣ならで、歌　賴む博多の小女郎がなくば、世帶の花も縮緬と、こんな姿にせまい物、ぬめ幻しの此世から、未來〳〵も夫婦ぞと、縋りついてぞ泣居たる、歌　關のお地藏は、親よりましと　地　聞くなれど、まさらぬ此世の舅御の、機嫌直して給はれと、賴みを直に救ひ乘せ、共に助かる駕籠舁の、駕籠やりませうと歩み來る、地　おはりへ行く者、先の宿まで駕籠賃幾許、石藥師までは、道は二里ある駕籠賃ころり、ころりは知らぬ、知らずは錢百、それは高い、負て行きましよ、七十〳〵、地　好いは負けたと駕籠下す、道は一筋駕籠二挺、二人思ひを

●まさしかれ　心の中に何事もなきやうと念じたるなり。まさしかれは正しかれなり。

抱乗て、打見るよりは肩重く、　詞小川じや、そこせいかたせい、まつかせ、　地杖突坂小谷大谷打過て、日影も我も〳〵行く空の、末果しなき旅衣、昨日今日とは思へども、都を出て日數さへ、四日市にも程近き、追分にこそ　三重　着にける、　地まさしかれと心中に、賴みをかけし辻占の、駕籠昇が詞のはづれ、惣七が胸に應え、かゝらぬ繩に氣を縛られ、向ふの人は下るれども、我心から身をすくめ下りもやらず、コレ小女郎、　詞先そなたから乘替て先へ行きや、そんならお先へ參ります、四日市とやらで待て居よ、　地駕籠の衆早ふ連れましてやとおりゐの駕籠の河合村、小女郎は何の氣もつかず、フシ駕籠に任せて乘かへ行く、石藥師から來

る駕籠の者聲かけて、　詞女中の連衆乘せた駕籠は是か、うちも聞た駕籠かよい、おつと幸ひ、サア立てい、旦那殿替へまする、下りて下されと、駕籠の簾を打上る、　地相手は駕籠をハヤ下て提げたる風呂敷包、身輕い出立の袷股引、こはぜ脚袢に身を堅め、腰に早繩見るからぞつと惣七が、餘所見る顏は我顏を、見せじと忍ぶ煩冠り、心早に下り立て、駕籠の衆太儀と乘り替る、駕籠の簾我手に取て引下し、急ぎの者じや增やらう、サア駕籠遣たといふ聲は、フシ人の耳にも顫ひけり、　地小町屋惣七捕たと聲を打かける、駕籠により苧の細引網、中に是はと蹠けども、翼なければ飛れもせぬ、駕籠の鳥かや惣七は、フシ中に音を泣くばかりなり、豫

●細引網　囚人を送るには駕籠に乘せ其の上に網を懸けて逃走を豫防す。

て相圖のこやの者、十手提げくる〳〵と押取卷き、
科は心に覺えがあらう、其方共に仲間八人と分明の
仰を請け、我々捕に向ふたり、尋常に召捕らるゝか、
踏付て繩かけふかと、いへども念佛の聲の外、何の答
へもあらざれば、爰は途中次の宿まで此儘連行き、繩
かけて國へ引け、これ駕籠遣れ心得ました、迚も遁れ
ぬ命じやに、爰で繩をかゝらいでと、呟き〳〵立寄て
駕籠舁上ればがば〳〵と、駕籠から漏て流るゝ血は、
大地に氈毛敷く如く、乘人はうん〳〵喚くにぞ、調や
れ駕籠の内で自害した、地出合へ〳〵と駕籠投捨て、
恐れて側へ寄附ず、地役の者共立懸り網引除け、簾上
れば這は如何に、一尺五寸切刄際まで突込で、刄先は

弓手の脇腹に蟲の息、眼はぎろ〳〵フシ呆れて詮方な
かりけり、地斯る處へ小女郎が身にもかゝつた縛繩、
引れて來る身の悲しさより、此有樣を見る悲しさ、流
れし血汐を踏しだき、駕籠の内へ顏差入れ、小女郎が
來ました、私も今縛られた、繩かゝりましたぞや、昨
夜までも一つ枕に起臥て、一所と契りかはしたに、こ
なさん一人が先立て、ながらへ物を思へとか、苦しふ
ござろ、じゆつないかと、言ふも涙に搔暮て、前後も
覺えず泣居たり、地惣七苦しき目を見開き、調ナヽ繩
かゝつたか小女郎、國法を破り、親に不幸の大惡人、
廣い世界に狹められ、所の住居もならぬ樣に身を持な
し、落付く方なく當途なく、地此所まで迷ひ來て、天

の網地の縄に搦められし此惣七、故郷へ引かれ死罪に遭はゞ、一門の頰に血を注ぎ、親へは不幸の上塗と、思ひ定ての自害、毛剃九右衞門が海賊に與し、今迄身に纏ひし繻子縮緬、そなたに着せた綾錦の冥加に盡き、菰被る身に成果た、地夫につるゝ慣ひとて、そなたまで縄をかけ、名を流させ憂目を見するは、我一心より事起る、此惣七がなかりせば、今の憂い目は見せまいもの、不便や嘸悲しかろ、長くも添はぬものゆゑに、命のかいまでなしたよな、許してたもれ小女郎と、いふ聲もハヤ息切れし、頼み少く見えにける、地鋭く見ゆる捕手共、獄屋へ渡しては叶はぬ事、人は互、兩方名殘惜ませよと、フシ了簡するこそ優しけれ、地聞けば

●檢非違使　非法非違を檢する役。

聞く程猶悲しく、其起りは誰がさすぞ、小女郎を人手に渡すまいとの御心から、親御に替へ命に替へ、女房に持て下されし、それ程私がかわいひか、冥加ないとも忝ないとも、お前に禮をいふ詞、日本は愚の事、唐土天竺にもよもあるまい、此手が自由になるならば、拜んで死度ふござんすと、夫の膝に顔差寄せ、消入り絶入り咽せ返れば、此世で逢ふは今ばかり、來世もかはらぬ女夫ぞや、南無阿彌陀佛、彌陀佛の、聲もかすかに脇指ぐつと、拔くより早く息絶えたり、小女郎わつと聲を上げ、待て下され連立度い、遲いか疾いか殺さるゝ我命、皆樣お慈悲に今爰で、殺して下され殺してと、フシ狂ひわなゝき駈廻る、地斯る所へ檢非違使

●當今　今上天皇の事。「死罪一同」は死罪一等なるべし。

の某眞先立ち、爰かしこにて召捕たる海賊原、傾城交り繩付共、一度に彼處へ引來る、檢非違使一札押開き、囚人共に申聞する趣、有難くも承れ、一沖がゝりの大船に通路を求め、波を潜り水底を拔け船へ近付、諸色を奪取し事國法を背く大罪、武士に仰せて死罪あるべき所、當今御即位の御悅びによつて、死罪一同を勅免なり、と聞も果ず繩付共、蘇生たる心地して、一度にあつとぞ勇みける、地重て傾城共に打對ひ、汝們は流れの身、彼奴等に添ふは勤の慣ひ科にあらず、行先とても構ひなし、繩を許せとありければ、畏つて雜色共、立寄り解く繩の跡吹擦り撫擦り、調王樣の意氣方は又格別なものじやないか、此手が自由になつたれ

ば、廊の門を出た樣なと、笑ひ悅ぶ其中に、小女郎は始終しく〳〵涙、留めかねたる顏振上げ、連合の惣七殿、斯るお慈悲を待受ず、私を捨、此世彼世へ飛去て、比翼の鳥の片羽がひ、今が博多の此小女郎、生て甲斐なき命ぞや、お慈悲に殺してたべのふと、聲も惜まず泣居たる、ヲ、尤〳〵、夫惣七同類とはいひながら、色に迷ひし若氣の至り、罪の輕重明白たり、自害せしは其身のふしやう、汝夫に成りかはり、親惣左衞門に孝行盡し、後世を弔ひ得さすべし、勅に任せ、彼奴原それ追拂へ、重ねて惡事を止炙の、顏に燒鐵入瘧、耳殺ぐ剔ぐ、ちみどろちんがい追拂ふ、隣國他國幾萬人、博多小女郎が物語、語るも聞も後代の、永き噂を

遺しけり

（近松傑作全集第一終）

卷之一、明治四十三年六月十二日印刷、十五日發行
卷之二、明治四十四年七月十二日印刷、十五日發行
卷之三、明治四十四年八月十二日印刷、十五日發行
卷之四、明治四十三年九月十二日印刷、十五日發行
索引、明治四十三年十二月十二日印刷、十五日發行
大正十年七月一日訂正再版印刷、四日發行

（每卷正價金四圓七拾錢
索引正價金壹圓貳拾錢）

校訂註釋者　水谷弓彦
發行者　種村宗八
東京市牛込區辨天町百五十七番地
印刷者　渡邊八太郎
東京市牛込區榎町七番地

大正出版部
不許複製
早稲田學

發行所　東京牛込早稲田　早稲田大學出版部
振替東京一二三番電話番町三七四五番　二四二二番

日清印刷株式會社印刷

賣捌所

東京神田　東京堂
東京日本橋　至誠堂
東京京橋　北隆館
東京京橋　東海堂
大阪東區　盛文館
名古屋市　星野文星堂

（其他各地書肆）

329
491

終